庭園 協会ニュース 第95号

一般社団法人 日本庭園協会

東京都新宿区西早稲田 1-6-3 フェリオ西早稲田 301
〒 169-0051　TEL:03-3204-0595（FAX 兼用）
E-mail : gsj20@m7.dion.ne.jp　URL : http://nitteikyou.org/

編集者：広報委員長・柴田 正文
　　委員・小沼 康子、内田 均、鈴木貴博、豊藏 均
題　字：故・上原 敬二
発行日：2019（平成 31）年 1 月 31 日

横浜市港北ニュータウンで計画的に残された雑木林と池は人々の憩いの場として親しまれている

これまでの百年　そしてこれから

加藤 精一

平成31年（２０１９）、新年おめでとうございます。

「平成最後の」という言葉が、あちらこちらで聞かれますが、新元号となる今年は、日本庭園協会にとりましても、１０１年目を迎える、新たなスタートになる年となります。

昨年は、創立百周年記念誌、記念式典、祝賀会そして東日本大震災復興記念庭園の築庭等、数々の創立百周年記念事業を無事に行うことができました。大変多くの会員の方々のご協力を頂きまして、本当にありがとうございました。日本庭園協会として、確かな礎を残すことができたのではないかと思います。

これまでの１００年を思えば、大先輩方は、関東大震災、太平洋戦争および戦後復興、高度経済成長、バブル崩壊等、近代の日本人の暮らし方や住環境が激変するなか、「日本の庭園」のありようを、変化・対応せざるを得ない困難を乗り越えながら、随分とご苦労をされ、この日本庭園協会を存続させてきて頂きました。

バトンを繋ぐ私たちとすれば、これからの１００年を思うと、世の中の変化のスピードは、これまでと比べようもなく早くなり厳しい条件が次々と課せられるのではないでしょうか。しかしながら、当協会の会員の皆様は、問題意識が高く常に今の課題に取り組み、伝統を守りながら、日々の革新と工夫をされていると思います。「庭園文化」は日本を代表する文化の一つだと確信しております。その「庭園文化」を守り続け、さらに現代社会に必要とされ、生き続けられるようにしていくにはどうすれば良いのか、会員の一人一人が考えていることと思います。１０１年目のこれからは、その力を結集し、切磋琢磨していくことが、日本庭園協会に必要とされることではないかと思います。

また、最近はＳＮＳで情報が手軽にやり取りでき、便利な時代となりました。それ自体を否定しようとは思いませんが、定期総会で全国の会員が集まる機会に若い世代の会員の顔が少ないように感じます。これからの日本庭園協会を思いますと、世代を超えた交流をもち、生の言葉を交わす機会を大切にしていき、先輩方から直接学び取ることも大事なことではないでしょうか。そしてこれからの当協会の存続と発展を願う次第です。

（常務理事　総務委員長）

平成30年度　第12回　日本庭園協会賞

新しい選考規定の下、日本庭園協会賞は新肇氏、審査員特別賞は内山貞文氏に贈られることに決定し、平成30年10月21日に日比谷公園内の松本楼で開かれた創立百周年記念式典で発表され、表彰式を行い賞状、記念品が授与された。

日本庭園協会賞は、平成4年第1回の河西力氏受賞以来、途中で選考の休止期間や、該当者無し等の期間を経て、今回第12回目を数え、ここ数回の選出においては、各支部推薦の対象者から、常務理事を中心とした選考委員会において選出されていた。今回は作品、業績に関して本人自らの応募として、それを審査委員会の審査によって選考され、常務理事会の承認を経て選出されることとした。

その結果、15名の応募が寄せられた。審査委員は、井上花子氏（日本造園組合連合会理事）・大北望氏（造園家）・河西力氏（第1回受賞者）・亀山章氏（東京農工大学名誉教授）・川村善之氏（川村庭園研究室主幹）・三鍋光夫氏（建築家）・和田新也氏（日本造園建設業協会会長）の7名とした。

龍居竹之介名誉会長の推挙もあり、庭に関する幅広い分野の先生方で構成され、設計図面、趣旨説明、画像、動画を1ヶ月程前に各審査委員の方々に送付して事前審査をお願いした。採点、講評を記入頂き、それらを基に一同に会して審査が行われた。

審査の過程においては、各応募作に対して熱く厳しい意見、講評が多く出された。

その中でも一番多かったのは応募書類に関する不備、プレゼンテーションの拙さで、特に図面に関しての指摘が多数の応募作品に出された。最低限のエレベーション、ディテールも無く、平面図1枚だけであったり、平面図においても実際の写真画像との比較対象もできないものなどで、果たして実際の庭づくりに際しても、この図面で施主が説得できるのか？建築の場合ならば考えられない等の意見が多数あった。

また、設計意図、趣旨に関しても、作庭コンセプトの曖昧さ、欠如の応募が多数で、庭の形、材料の説明に終始しているものが多く、自分の考えや思いを具体的かつ明確に説明があっても良いのではないかとの講評が多かった。写真に関しては画像の画質の問題や、撮影方向の不適正が挙げられた。

日本庭園協会賞に応募するということは、作品の優秀性はもちろん、企画趣旨、設計意図、設計図、施工写真、作品の独創性、構成力、特異性、精神性、施工技術などすべてを含む総合力が審査対象となるということが再確認された。

実際の作品に対しては、細部の技術的なディテールについては素晴らしいのであるが、技術のみに溺れてしまい、その先にある作品性や表現が感じられず、大作であっても「新たな庭園の可能性を示唆する作品」という庭園協会賞の審査基準に沿っていないとの評価が与えられた応募作品も少なくなかった。

その結果、日本庭園協会賞には、福島県の新　肇氏の折橋邸が選ばれた。受賞理由は、現地の風土を庭園の要素に取り入れ、土地と環境に適応した庭であり、現代の戸建て建築、生活スタイル等を盛り込み、豊富な経験と実績を積み重ね優れた技能を持って、全体を上質にまとめているのは、今日まで庭に対して真摯に取り組んできた賜物である。今後とも、ひとつひとつの事柄を追及し、本質に迫り、より独自性、独創性に繋げていき、更なる発展への期待を込めてということが、審査委員会の総意であった。

また、ポートランドの内山貞文氏のポートランド日本庭園は、周りの環境を取り入れ、自然の山肌をそのまま残し、ブリッジで観客を導入する手法は、建築、庭とをバランス良く存在させ、融合させ、素晴らしい景観として成立し、周囲のロケーションと三位一体の風景が生れた。また海外の地で、日本とは格段の厳しい条件や制約の伴う中、長年に渡り日本の庭園文化を広めていくご苦労に敬意を表するものであるという意味も込められた。

審査委員会においては、最後まで新氏と内山氏の2人が残り、最終的に投票で新　肇氏が選出されたが、審査委員の中から準ずるような形でという意見が出され、内山貞文氏に審査員特別賞が贈られることとなった。

（高橋良仁　日本庭園協会賞選考規定検討委員長）

日本庭園協会賞

新　肇（あたらし　はじめ）氏

（福島県・創苑）

【プロフィール】

（有）創苑 代表取締役。作庭家。1964年埼玉県生まれ。神奈川大学中退後、厳美造園（横浜）、福島・磐梯園（福島）を経て1992年（有）創苑を設立。道因寺庭園（『庭』208号発表）で郡山市まちなみ景観賞受賞。代表作：小川のある庭（『庭』183号発表）泉屋酒店の庭（『庭』200号発表）、滝田三良法律事務所庭園（『庭』208号発表）他、住宅、店舗、寺院、病院などの作庭を手掛ける。

kuribari@ezweb.ne.jp
weblog 創苑の杜

手前の芝生地は来客時の駐車場としても使える折橋邸全景

浴室から見た目隠しを兼ねた石積

審査員特別賞

内山 貞文（うちやま　さだふみ）氏

（アメリカ・ポートランド日本庭園）

【プロフィール】

ポートランド日本庭園ガーデンキュレーターとして庭園を統括。福岡県久留米市田主丸出身。西日本短期大学造園科卒業。青年海外協力隊（タンザニア1979～81）、国際協力事業団専門家（イエメン1984～86）を経て1988年渡米。イリノイ大学芸術学部造園学科卒業、同大学院修了。

日本庭園の技術と欧米のランドスケープアーキテクトとしてのトレーニングを融合、個人庭園から公共緑化と幅広い分野で活動。代表作は、シカゴ市ジャクソンパーク、デンバー植物園やデューク大学内の日本庭園など。北米日本庭園協会（NAJGA）の構想・設立発起人。2010年からアメリカ各地で、商業施設・個人住宅など、隈研吾氏とコラボレーション。

アメリカをベースとして講演・執筆活動。公共日本庭園や大学にて造園設計・施工指導を行っている。

suchiyama@japanesegarden.org
https://japanesegarden.org

拡張施設の玄関口「エントランスブリッジ」

雨戸を開け放ったビレッジ本館

新年のご挨拶

会長　高橋 康夫

会員の皆様におかれましては良き新年をお迎えのことと心からお慶び申し上げます。

昨年は皆様のご支援ご協力によりまして日本庭園協会創立百周年記念事業を無事に終えることができましたこと、心より御礼申し上げます。

5月18日の東日本大震災復興記念庭園開園式典をスタートに清澄庭園連続講演会、浅草寺本坊伝法院庭園修復基礎研修、そして10月21日の記念講演会と記念式典・祝賀会と走り続けた一年でありました。その間、多くのご寄付や準備のために骨身を削ってご協力を頂きましたことに対して感謝申し上げると共にその力が結集された結果、日本庭園協会の底力を世に示せたことを大変嬉しく思っております。

特に日本庭園協会初代理事長の本多静六博士が設計した日本で最初の洋風近代公園であり、日本公園史発祥の「聖地」ともいうべき由緒ある日比谷公園で記念式典を挙行できたことは、庭園協会にとりまして誠に意義深いものでありました。

さて、今年は元号が平成から変わります。日本庭園協会も101年目を新元号と共に歩み始めます。今までの100年は昨年で総括してまだ踏み込んでいない新たな境地を目指したスタートにしましょう。

日本庭園協会の役割は庭園の価値や素晴らしさを多くの方々に伝えることと、庭園の伝統技術を後世に継承していくことです。今まで100年にわたり庭園、公園、園芸及び風致の研究、並びに普及などを目的として事業展開をしてまいりましたが、新しい時代にふさわしい庭園文化を提案していきたいと考えています。

それには変わるべきものと変えてはいけないものをしっかりと見定めて、本部と支部が一体となって事業展開をしていくことが大切です。風通しの良い、特に若者が自由に発言できる場を作っていきたいと考えています。さらに、海外にも目を向けて日本庭園がユネスコの無形文化遺産に登録されるよう、関係する団体と連携を深めて推進していきます。

龍居名誉会長は「各方面の有識者に協力を求め、利害を超越して庭園趣味を楽しむ懇親団体にという上原先生の主張に、改めて眼を向けることが今後の道への第一歩」と述べられています。庭園を狭いところに押し込めないで、自由にあらゆる立場の人たちとコラボレーションをして行くことが大切です。

日本庭園協会は、補助金を受けるなど特段のしがらみがないので、社会に対して言うべきことを率直に言える唯一の団体です。庭園や公園の保護や保存などについて社会に対して「庭とはなにか」を訴え続けると共に庭園の魅力・その楽しみ方を市民の皆様や海外の庭園を愛する皆様にお伝えすることが大きな役割であると考えております。

元旦に、武蔵野の台地から黄金色に染まる富士山を見ました。まばゆい光の中で富士山は今までの百年を見送り、新しい時代が始まったことを告げているかのようでした。

武蔵野台地から望む富士山

鑑賞研究委員会主催　秋季庭園見学会　2018(平成30)年11月8日～9日

今なお新しい感動を生む重森三玲の庭

清水 一樹

松尾大社の境内に立つと、本殿の裏にある御神体山の木が倒れ、岩肌が露わになっているのが見える。重森三玲の遺作となる同社の「上古の庭」作庭にあたり、畏敬の念を抱くと同時にその存在を強く意識したという、その山にある「磐座」と同じような、大きな岩盤である。今回の見学会の講師、重森千青先生は、祖父である三玲の原風景として、彼の故郷岡山の「豪渓」という、切立った岩山の景勝地を紹介してくださったが、三玲の「石」に対する強いこだわりは、このような神仏と自然の在り方に端を発しているのだと改めて感じられる。この岩盤の露出は、先の台風21号の影響だという。「第三室戸台風といっていい」と千青先生がおっしゃる通り、京都に大きな被害をもたらしたこの台風の本家、昭和9年の「室戸台風」による庭園への甚大な被害が、三玲を全国古庭園実測調査に駆り立てるきっかけとなった。その成果『日本庭園史圖鑑』は、今日においても古庭園研究のバイブルであり、特に実測図は、今日の文化財庭園修復にも活用されている。古庭園研究のみならず、いけばな、お茶、建築と幅広い分野において重要な役割を果たした三玲の作庭は、それら日本の歴史と伝統と、当時の技術的・美術的動向をハイブリットし、日本庭園に新境地を開こうとしたものであった。青石の立石と白砂、苔山の有機的な曲線のフォルム、ベンガラを混ぜたモルタルの縁取り、実に重森三玲らしい枯山水の坪庭が、泉涌寺の非公開庭園である「錬成道場前庭園（仙山庭）」である。

松尾大社「上古の庭」

瀟洒な雪見燈籠が池畔に佇む「御座所庭園」は程よく紅葉し、塔頭善能寺の「仙遊苑」も見事な庭園ながら、池の漏水や樹木の繁茂が口惜しい。続いて東福寺はまだ紅葉の客でごった返すには至らないが、その中国から開山聖一国師が持ち帰った通天紅葉が、現在の赤い紅葉ではなく「トウカエデ」のことだったとの千青先生のお話に膝を打ちつつ、目指すは本坊「八相の庭」である。南庭の蓬莱四仙島のこれでもかという力強さに対し、西、北の市松模様は今日も真新しい感動がある。「永遠のモダン」を標榜する作庭家の面目躍如たる様々な工夫は、塔頭龍吟庵の庭にも見られ、黒雲の中の龍、竹垣の雷、赤砂利の中には、幼い日の大明国師にまつわる物語が、写実的と言っていい様子で表現されている。

最後に訪れた一華院では、千青先生の作庭による庭園を拝見した。祖父と父の思想・技法をオマージュしつつ、異なる素材と造形感覚による美しく見ていて楽しい庭園を拝見すると、「一庭一庭が創作」を標榜した三玲の精神が生きていることを感じた。（評議員　栃木県支部長）

泉涌寺「錬成道場前庭園」

東福寺塔頭龍吟庵「龍の庭」（西庭）

緑と水の市民カレッジ「みんなの緑学」講座　2018(平成30)年9月22日

小沼康子 講演会『白洲正子が愛した庭』を聴いて

藤枝 修子

「みんなの緑学」の講演会が2018（平成30）年9月22日（土）に、日比谷公園内の「緑と水の市民カレッジ」で、本協会との共催で行われました。

講演中の小沼康子講師

主題は「白洲正子が愛した庭」でしたが、講演では、女流文学者たちの「住宅と庭」として、吉屋信子、林芙美子、白洲正子が紹介されました。この3人の女性が生きた時代は、女流作家として生きやすい時期とは言えなかったかもしれません。講演会では、写真や図表を含む詳細な資料をいただきました。

まず、吉屋信子が生きた時代は、政治、社会の変遷に応じて庭や住宅建築も変遷し、女流作家とはいえ、市民の住宅事情にも影響を受けまし

た。そして家族の転勤などにより、転々と居を変えました。独立後、豪邸とは言えないまでも、平均的日本人の住宅事情に見合った住まいを得ていました。吉田五十八が建築設計をし、飯田寅三郎（後の十基）が竹の庭をつくった牛込砂土原町の家は、戦災で焼失しました。鎌倉長谷に建てた家は、終の棲家となり、没後、鎌倉市に寄贈されました。

次いで、林芙美子の住まいは少年期に父母の行商に伴い転居を重ね、青年期には上京して、新宿区、中野区、渋谷区、世田谷区、文京区を同棲しながら転々としました。結婚後、借家により居を変えましたので、自分の好きな庭を楽しむことは難しかったと想像されますが、昭和14年に下落合に土地を購入し、昭和16～26年（38～48歳）の間、住みました。自宅からの見晴らし、庭や佇まいなどにはこだわりを持ち、和風建築の名手である山口文象の設計により竹の庭を好みました。

最後に白洲正子は、祖父樺山資紀、父樺山愛輔と母常子のもとに生まれました。東京永田町の自邸はジョサイア・コンドル作１８７７（明治10）年で、20歳まで過ごし、夏は御殿場の別荘（瑞雲楼）が使われました。

この別荘の庭づくりに母（常子）が力を入れ、庭師松本亀吉の仕事ぶりが見事だったとのこと。その後、アメリカへの留学後、大磯の別荘「自然亭」の離れに住んだのち、赤坂氷川町、軽井沢別荘、小石川水道町など10ヶ所位に転居後、昭和18年～平成10年（正子32～88歳）は鶴川村の茅葺き屋根の家、武相荘に住みました。庭園管理を行った福住豊氏（飯田十基の弟子）からの聞きとりでは、「あるがまま」の自然を愛した正子の自然観、庭園観など、貴重な情報を知ることができました。

（副会長　鑑賞研究委員長）

支部活動報告

鳥取県支部／北海道南支部

全国大会で優秀な成績（銀賞）を収める石のマイスターであることが親方の心を動かしたのでした。実際、公照氏の確かな技術によって今回の講習は成功裏に終えることができました。

さらにそれに加えて、島根県支部の方々の熱意が、親方をこの山陰の地に招請できた要因であり、深く感謝申し上げます。その昔、尊敬する福山の庭朋会の皆さんが庭の師匠を求めて日本庭園協会に入会し、全国行脚の集大成として沼隈の平家谷にて伝統庭園技塾を開催された頃の姿とオーバーラップして、こんなに庭づくりに熱い仲間が山陰の地に出現した感激を禁じえず、涙がこみ上げてまいりました。

鳥取県支部　安諸塾ＩＮ鳥取

２０１８（平成30）年10月26日～28日

いま山陰が熱い！

石亀　靖

２０１８（平成30）年10月26日から28日にかけて、「安諸塾ＩＮ鳥取」と題して、石仏彫刻の講習会を開催致しました。この講習会は昨年、島根県支部が安来市奥野邸で行った「安諸塾」に参加した際に、「鳥取で若い作庭家を集めて石仏を彫ろうよ」と安諸定男親方の進言が発端でした。安諸親方と前鳥取県支部長の田中節照氏に20年来の交流があり、息子の田中公照（雪松 社長）氏が岡崎で石の修業中に第41回技能五輪

石彫に取り組む作業風景

講習会は田中公照氏を講師に、30名の参加者で各自独自の羅漢さんの彫刻にチャレンジしました。ほとんどの塾生は石材を扱った経験がなく、石道具の扱い方から説明を受け、新品のノミでは石を彫ることができないことを知り、まず道具を研ぐことから始まりました。エアーチッパーでも同じことです。チゼルの研ぎ方ひとつで使い勝手の良し悪しや破損を防ぐことを教わりました。

次に、コヤスケと丸ノミを用いて天端の仕上げ方を学びました。続いて親方から来鳥記念の石碑に標すため、「楽只遊石理定（らくしゆうせきりてい）」のお言葉を頂き、サンドブラスターで手掘り彫刻の実演を見せてもらいました。お言葉は、「道を定めてひたすらに庭づくりを楽しめ」とのことだと記憶しております。

ただただ親方と一緒の時間がもったいないので、お昼を食べながら東京都支部が作成されたＤＶＤ『土塀』を見せて頂きました。親方が猛暑の中ご指導なさってる姿は観てるものを魅了し、時折ご自分の姿を見て発せられる親方ジョークに和みました。まさに「庭づくりに熱中症にならん」と皆心に刻んだことだと思います。続いて方丈さんより、瀬戸内寂聴さんの文献を引用したありがたい教えを授かりました。

これより花沢石を彫って、羅漢さんを彫ることになります。

あらかじめ粘土で塑像のモデルを作っておいたので、そのイメージで石材に輪郭線と中心線を墨付けしました。中心線は最後まで付け直すことが重要です。サンダーで大まかに削り取りましたが、その粉じんのすごいこと。作業場所をコンパクトに設営したため、皆さんがほこりまみれで大変でした。親方もこの塾生の姿を見られ、いたって感銘の言葉を頂戴しました。カニを食べるとき、無口になります。それと同じように、皆は石像彫りにはまって黙々と羅漢さんと向き合っていました。

個性的な羅漢さんたち

最終日は、田中公照さんの事務所に移動して仕上げました。初めて使うエアーチッパーと格闘しましたが、どれも個性的で素敵な羅漢さんが出来上がりました。後日、会場提供をして頂いた鳥取市の栖願寺さんに羅漢さんを安置させて頂きました。栖願寺さんの方丈の庭は雪松さんが手がけられた「八正道」の庭です。栖願寺さんの第３の宝物（ほうもつ）として頂けますでしょうか。定めし、個々の出来の良し悪しは言いっこなしで、安諸親方と共に過ごした時間をつなぎとめる羅漢さんは、その場にいた塾生だけの宝物（たからもの）となりました。

最後になりましたが、今回の安諸塾に関わって頂いたすべての皆様に感謝を申し上げます。これからも、かつて多くの若手作庭者を育てた小形学校（造園家小形研三）に触れあえたように、恩返しを山陰の地でできるよう心掛けていきたいと思います。

安諸親方を囲んで集合写真

来る新元号の初年度10月に倉吉市にて、伝統的作法（さっぽう）による版築づくりと野面積み「安諸塾ＩＮ鳥取２０１９」を開塾致します。多くの参加者の皆様に、安諸親方の薫陶を共に受けて頂きたく、ただひたすら皆様のご健康を祈念して、お会いできることを心待ちにしております。親方とお話をする中で、期せずして恩師斉藤一雄先生の話題が出て、とても懐かしく思いました。

安諸親方、本当にありがとうございました。

（評議員　鳥取県支部長）

安諸塾ＩＮ鳥取に参加して

鈴木　雅渡

私が初めて石仏に興味を持ったのは20歳頃で、まだ庭師の仕事をする前でした。旅行が趣味で、庭などにも興味があり、全国各地の庭を見て回っていました。そんな中、京都の三千院の庭を見に行った際に「わらべ地蔵」という石仏を見た時、そのすごく優しく楽しげな表情に心を打たれたのを今でもはっきりと覚えています。造園業という仕事に就き、木や石に直接触れるようになり石仏なども身近に感じられて自分でも作ってみたいと思うようになりました。安諸塾初日、講師の田中公照さんから道具の使い方や石道具の研ぎ方などを一から学ぶことができました。講師の方から「あとは体で覚えてください」と度々言われたのが印象的でした。夜は安諸親方や参加者の皆さんたちで懇親会があり、各地から来られたたくさんの方たちと話

田中公照講師の説明に聞き入る塾生たち

をすることができ、いい刺激をもらうことができました。2日目はいよいよ実習です。今回は彫った羅漢像を会場でもある栖願寺さんに奉納するとのことでしたので自分なりに考え、心を込めて彫ることにしました。黙々と石を彫る中、安諸親方に「自分の思っている通りにやってみるといいよ」と声をかけて頂き、自信を持って彫ることができました。仕上がりは何とも言えない出来になってしまいましたが、今回の記念にサンドブラストで記念碑を作る際に安諸親方の書かれた「楽只遊石理定」という言葉の通り、自分の定めた道を楽しみながらできたのではないかな⁉と思います。造園の仕事は樹木や石を扱うだけではなく大工仕事であったり、左官仕事など何でもやらなければならず、覚えることがたくさんあり大変ですが、できた時の喜びやお客様に喜んでもらえて、やりがいのある仕事だと思います。自然との向き合い方や庭に込める願いや思いなども豊かに表現できるように、もっと勉強していきたいと思います。今回学んだことをもっと自分の中で深掘りして、これからの庭師人生を楽しめる一つの武器にしていきたいと思います。

（一般参加　愛知県在住）

北海道南支部
廣瀬慶寛・竹田利光講演会
「庭を創る」
2018(平成30)年11月3日

講演会を企画して

桃井 雅彦

よく会食の席などで出された料理に苦言を呈す人がいますが、同じように庭を見学していても「これは良い」「これは良くない」と言う人がいます。私もそうかも知れませんが、よく考えるとそれは個人の嗜好の違いであり、他の人はまた違った考えがあるのは当然のことです。私も知らぬ間に偏ったものの見方になってはいないかと意識して気を付けています。見方によって庭もさまざまな形につくられるものだというテーマで今回の講習会を企画しました。

そのような思いを以前から持っていましたが、宮城での伝統庭園技塾で、竹田さんと夜飲みながら庭園談義をしている時に、講演してもらったら面白いなと思い「函館に来て講演してくれませんか」と誘いましたら、快く「ぜひ」と引き受けて頂き、塾長の廣瀬氏にもお願いして来て頂けることとなりました。しかし実際に講演会を開催するとなると準備も大変で、日程の調整などで時間がかかりましたが何とか開催にこぎつけることができました。

講演会に参加頂いた皆さんが、今の自分とは違う何かを心に感じて頂いたならば意味があります。2人の作庭観を皆さんがどう受け止めたのか興味のあるところではありますが、各自が今後の作庭に生かして頂ければと思います。

今回の講演会を機縁にしてこれからも色々と企画して、支部活動を行いたいと考えております。

（評議員　北海道南支部長）

竹田利光講師（左）講演風景

『攻めの庭、守りの庭』

豊田 浩士

11月3日北海道南支部では廣瀬慶寛氏・竹田利光氏をお招きし「庭を創る」をテーマに講演会を開催しました。竹田氏の講演は作庭に革命を起こす。自分のオリジナル、今まで見たことのないジャンル、見たことのないものを創ることに挑戦をしたい。その中で竹田氏はユーモアのある庭を創りたいと今まで作庭した庭の写真を幾つか見せてくれました。それは自分が今まで想像していた庭とはかけ離れたもので、まさに新しいものづくりへの挑戦、攻めの作庭と感じました。廣瀬氏の講演では、できるだけ自然に学び、自然の流れを見るだけでも庭づくりの勉強になるという内容でした。幾つか作品を見せて頂きましたが石組や燈籠、植栽などを使い、伝統的な技術を使って落着いた空間を作られていますが古臭くない庭に感じました。テーマは「庭を創る」でしたが人それぞれの考え方で庭といっても全然違うものになるということに気付き、今後自分がどんなものを作りたいのか考えさせられる講演会でした。

これからも色々な人の作品を見て、いつかは自分らしい庭が作れるよう頑張りたいと思います。

（正会員　北海道南支部）

庭園協会ニュース94号　訂正

庭園協会ニュース第94号3ページ創立百周年記念講演「日本庭園の未来100年後を夢見て」の講演者ほかが抜けていました。粟野隆　東京農業大学准教授　講演要旨　文責・柴田正文　です。

訂正してお詫び申し上げます。